群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編　第45巻　215—230頁　1996

テクノクラシーから生活世界へ

豊　泉　周　治
群馬大学教育学部社会科教育講座
(1995年9月13日受理)

Von der Technokratie zur Lebenswelt

Shūji TOYOIZUMI
Depertment of Sociology, Faculty of Education, Gunma University
Maebashi, Gunma 371, Japan
(Accepted September 13, 1995)

はじめに

生活世界の概念が社会学の領域で一般にもちいられるようになり，およそ四半世紀が経過した。フッサールの超越論的現象学に由来するその概念は，この間，社会学の方法と対象とを大きく変容させて，社会学的な社会認識の新しい地平を大胆に切り開いてきた。おそらく今日，この概念を抜きにして現代社会の理論把握は成り立たないにちがいない。かつての秘教的なイメージはすでになく，いまや多くの研究者が当然のようにこの概念をもちいて社会分析をすすめている。「生活」を論じることと「生活世界」を論じることの違い，そして後者を論じることの現代的な意義は，なかば自明視されているようでもある。だが，「なぜ，生活世界なのか」という問題に正面から答えることは，いまでもそれほど容易なわけではない。

周知のように，社会学におけるそうした理論状況の起点となったのは，ウェーバー理解社会学の現象学的基礎づけをめざしたA・シュッツの理論の再評価であり，さらに彼に学んで「現象学的社会学」の流れを確立したP・バーガーやT・ルックマンらの活躍であった。その時代は1960年代の半ばにまでさかのぼる。だが，生活世界をアメリカ社会学の一学派のテクニカル・タームから，「現代」という劇的な転換の時代における時代認識と社会理論の最前線にまで導き出したのは，まちがいなくJ・ハーバーマスの功績であった。ハーバーマスはシュッツらの議論に学びながらも，1960年代の終わりから1970年代全般にわたる時代状況との理論的格闘のなかで，生活世界の概念をもちいて批判理論に新たな生命力を吹き込んだ。それは今日，一般に批判理論の「コミュニケーション論的転回」ないし「言語論的転回」と呼ばれる転換であり（以下，「転回」とする），ホルクハイマー／アドルノ以来の批判理論の伝統そのものを刷新するものであった。社会学

化された生活世界概念の現代史的意義は，この「転回」を通してはじめて確認することができるように思われる。「なぜ，生活世界なのか」という社会学的な（認識論的ではなく）問いも，これを糸口として考えることができるであろう。

ところで、今日のハーバーマスにとって，批判理論はなかんずく「批判的社会理論」でなければならない。では，その場合の「社会理論」とはいかなるものであろうか。その点についてハーバーマスは，集光レンズ（凸レンズ）の比喩をもちいて，次のように述べている。

社会理論は，現代の細分化した社会諸科学や哲学研究（の光）のなかにあって，「一種の集光レンズとして光を集束する作用を発揮し，我々の現在に明るい照明の光を投げかけることができる」（NU，192／264）。したがって，その集光作用のなかで，「もし社会諸科学がもはやいかなる思想も燃え立たせることができないとするなら，そのときはじめて社会理論の時代は終わったということになろう」（TkH. II，563／下，400）。

ハーバーマスにとって，そのような社会理論の集光作用の中心に位置するのが，コミュニケーション的行為の概念と結びついた生活世界の概念であった。「転回」の軌跡を見るならば，生活世界の概念はあたかも集光レンズのように，哲学および社会諸科学の成果，諸々の認識論や行為論，言語論や道徳論などの成果を収斂させて，その焦点に現代西欧社会の批判的な認識を照らし出していることがわかる。

ハーバーマスはそうした「転回」にあたって，驚くべき理論的洞察力と構想力を発揮して，細分化した学問の一見ペダンティックな業績を自身の社会理論に総合しているが，それはけっして「教授＝批評家」[1] の衒学的な保身術というわけではない。「批判」という実践的な意図をもつ社会理論は，それが空疎な理想主義の危険に陥らないためには，科学理論に求められる経験的な要求に応えるものでなければならない，とハーバーマスはいう。それは，1930年代の初期の批判理論が目標に掲げ，しかし後に放棄した「学際的唯物論」のプログラムを回復することでもある。ハーバーマスによれば，そうすることによって，一方ではそれぞれの科学理論に自覚されることのない理論の社会的意義が明らかになり，他方では「批判」の規範的根拠が諸科学の研究する経験的現実のうちに差し戻されることになるからである。かつての批判理論の袋小路と国家社会主義の破局に至る現実に立ち合ったハーバーマスにとって，それは批判理論を再構成するうえで揺るぎない確信であった。

冷戦終結後の今日，戦後の社会科学が前提とした政治的・イデオロギー的現実は大きく変貌したが，ハーバーマスの社会理論のもつ集光力は依然として失われていないように思われる。昨今の日本社会の深刻な病理現象を見ても，劇的に転換しつつある不透明な時代状況のなかで，むしろハーバーマスが解明した生活世界の理論とその照明の光は，いよいよ「現代」という時代を照らし出す輝きを増しているように思える[2]。現代社会学にとってなかば前提となりつつある「生活世界」という社会認識は，ハーバーマスの議論にしたがうなら，実はこの劇的な歴史の転換の力学にはじめから棹差していたからである[3]。その点からすれば，彼のいう「社会理論の時代」

は，いままた本格的に始まったといえるのかもしれない。

小論では，ハーバーマスの批判理論における生活世界概念の受容と転回について，とくにテクノクラシーをめぐる当時の議論との関連から追究し，そこに照らしだされる「現代」という時代の社会認識，あるいは彼のいう「社会理論の時代」の構図とそこで喚起される「思想」について，考えてみたいと思う。もとよりハーバーマスの議論を祖述することを目的とするものではないが，今日，ハーバーマスの批判理論に学んで生活世界の概念を社会学的に受容することは，冷戦後の不透明な時代に照準するその構図とともに，そこで喚起される「思想」についても自覚的でなければならないであろう。「なぜ，生活世界なのか」という問いも，テクノクラシー論からの転換をとらえるとき，おのずとそこに一つの解を見いだすにちがいない。

1．生活世界と実証主義批判

「生活世界」の概念は，後期フッサールの思想を集大成した『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936年)において，はじめて中心概念として登場し，以来，超越論的現象学の最終的な思想を主導する概念として，現代哲学に大きな影響力を及ぼしてきた。フッサールは，遺著となったこの作品において，学問・科学の意味喪失を「ヨーロッパ的人間の根本的な生活危機」の表現として論じ，それに対して「自然科学の忘れられた意味基底としての生活世界」を回復する哲学の営みを，超越論的現象学の課題として確証しようとした。すなわち生活世界の概念は，その起源からして，時代批判と実証主義批判との接点で成立していたのである。

ファシズムの支配が強まるなかで，フッサールは時代の危機を学問の実証主義化の危機と結び合わせて批判したが，その主張は，ホルクハイマーらの当時の批判理論の実証主義批判と重ね合わせて見ることができる。そこに共有された時代の精神があることはまちがいない。他方，両者のちがいのなかでこそ，批判理論の独自の視点もまたきわだってくる。実際，後になってハーバーマスは，アドルノの後継者としてフランクフルト大学教授に就任する際(1965年)，教授就任講義（「認識と関心」，なお1968年の『認識と関心』はこの講義をさらに体系化した著作）でこの点を取り上げている。そこでハーバーマスは，ホルクハイマーの「批判理論と伝統的理論」の区別を引き合いに出しつつ，フッサールの実証主義批判の限界を指摘して，自身の批判理論の最初の構想を提示している。まずはこの議論を手がかりとして，当時の実証主義論争にもふれながら，「転回」以前のハーバーマスと生活世界概念との最初の位置関係を見ておきたいと思う。その講義において，ハーバーマスは次のように主張している。

「正当にもフッサールは客観主義の仮象を批判している。客観主義の仮象のために，法則的に構造化された事実の存在自体という見せかけが諸科学に生じ，そうした事実の構成が隠蔽され，そのことによって生活世界の関心（利害）と認識との編み込まれた関係が自覚されない。現象学自身は，そのことを自覚させるのだから，そのような関心から免れているように見える。すなわち，諸科学が不当に要求する純粋理論という名称は，それゆえに現象学に帰されるべきだというので

ある。……フッサールは学問の客観主義的自己了解を批判しながらも，伝統的な理論概念にたえず付着していたもう一つの客観主義に陥っている」(TWI，152f.／156)。

アドルノとポッパーが口火を切った「ドイツ社会学における実証主義論争」において，もっとも先鋭な論陣を張った若きハーバーマスは，実証主義との論争のなかで自身の批判理論の最初の構想を鍛えていた。論争当時の論文でハーバーマスは，フッサールを想起させる「社会的生活世界」という概念をもちいて，たえず二元論の陥穽にさらされる実証主義の危険を批判しつつ，一方，社会の総体性に依拠する弁証法的理論の優位性を主張している（PS，155ff.／161以下)。実証主義の分析的・経験的方法の限界に対して，弁証法的理論は「前科学的に蓄積された経験の基底」に反省して，実証主義の限界を克服するものとされた。その主張は現象学的（フッサール）でも，解釈学的（ガダマー）でもあり，いかにも過渡的な折衷であるが，その議論の根底にヘーゲル＝マルクス主義の総体性の思考を見ることはたやすい。

上の引用からもわかるように，『認識と関心』の構想においてハーバーマスは，生活世界を論拠とする実証主義批判を受容しながらも，それを「純粋理論」（伝統的理論）の自己了解としてではなく，批判理論の解放の弁証法として構想している。科学の実証主義への批判，つまり社会的生活世界の総体性への反省は，フッサールのいう超越論的主体への反省ではなく，認識を主導する関心への自己反省，すなわち認識と関心（解放的認識関心）とを統一する「批判」であり，自己反省による「解放」であるという。ここでハーバーマスは生活世界の概念を，フッサールの超越論的現象学によってではなく，ヘーゲル現象学（『精神現象学』）にならって「弁証法的」に受容し，さらに「批判としてのマルクス主義」の伝統にしたがって「唯物論的」に変容させている(TuP，228ff.／247以下)。すなわち，「超越論的主体の能作は，人類の自然史に基礎を有する」(TWI，161／164）という。結果として，生活世界の概念は，ここでは「人類の成熟への前進」という人類史の弁証法的総体性のなかに融合してしまい，固有の概念上の位置を喪失しているように見える。

一般にハーバーマスの批判理論を読み解く難しさは，その固有の実践的意図のもとで，認識論と社会理論ないし政治理論とがそれぞれ批判＝理論として一つに総合される，その媒介の難しさにある。もしその点が正当に理解されないとすれば，その総合はたんに「全体的理性の神話」（実証主義論争におけるH・アルバートの批判）にとどまることになろう。ハーバーマス自身にとっても，そうした媒介の難しさは当時の批判理論の再構成をうながす難点となった[4]。実際，ハーバーマスは後の「転回」において，いわば「全体的理性」を放棄して，生活世界の概念を再構成することになるが，それはアルバートの批判を受け入れたというよりも，媒介の困難を解くための再構成であった。第2節で詳しく論じるように，その意味で「転回」は，批判理論の実践的意図を現実化しようとする「展開」でもあったと思われる。ここでは初期の構想の難点と「転回」の意図をただしく理解するために，まずは実証主義批判の合わせもつ実践的意図を確認しておくことにしよう。

『公共性の構造転換』以来の著作を一瞥すればわかるように，『認識と関心』にまとめられた認識論（実証主義批判）の構想は，政治理論の側から見れば，明らかにテクノクラシー（技術至上主義による政治支配）批判に照応するものである。ハーバーマスは，「技術と科学は今日では支配の正統化の機能も引き受けている」というマルクーゼの基本認識を受けて（TWI，74／72），この時期に「＜イデオロギー＞としての技術と科学」など，いくつかのテクノクラシー論を発表している。すなわち，国家介入と結びついた後期資本主義の産業発展とともに，科学と技術はしだいに第一次的生産力と見られるようになり，社会発展を正統化するイデオロギーとして大衆の意識に浸透してゆく。一方，それに対応して，産業化と結びついた政治実践も技術主義的に矮小化され，大衆の脱政治化が拡大してゆく。現代のテクノクラシーの構図を，ハーバーマスはおおよそこのように見ていた。もはやそこでは従来の解放理論の構想，すなわち生産力の発展に解放の潜在力を期待しつつ，経済学批判によってブルジョア社会のイデオロギー（自由な交換）を批判するというマルクスの議論は，その前提からして嚙み合わなくなっている。そこでハーバーマスは，新たなイデオロギー批判の課題を以下のように定式化し直している。

「諸科学の物象化されたモデルが社会文化的生活世界に入り込み，自己了解をおおう客観的な暴力を獲得する。この意識のイデオロギー的核心は，実践と技術とのちがいの消去である。……テクノクラシーの意識はこの実践的な関心を，我々の技術的処理能力の拡大への関心の背後で消滅させてしまう。それゆえに新しいイデオロギーの挑発を受けてなされる反省は，歴史的に規定された階級利害の背後にさかのぼり，自己構成する人類そのものの利害関係を掘り起こさなければならない」（TWI，91／88）。

『認識と関心』の構想における，実証主義批判と解放的認識関心とのいささか性急な結びつきも，テクノクラシー批判を眼目とするハーバーマスのこうした政治理論からすれば，その意図するところは明瞭であろう。科学の実証主義的自己了解とは，ハーバーマスによれば，認識を主導する関心についての無反省であり，無反省であるがゆえに自身を突き動かす技術的認識関心への盲目的な信仰なのである。この信仰が，さらに実践的認識関心にまで浸透して，テクノクラシーの政治支配を正統化することになる。「この＜上からの合理化＞の過程を追って，我々は，技術と科学そのものが実証主義的な共通意識の形態をとり――そしてテクノクラシーの意識として表明されて――，解体されたブルジョア・イデオロギーの代償イデオロギーの位置を占め始める地点にまで至った」（TWI，93／90-1）。この地点において，認識関心を究明するハーバーマスの『認識と関心』の構想は，現代の政治支配を正統化するテクノクラシー・イデオロギーに対するイデオロギー批判の根拠として，批判理論の核心を構成することになるわけである。

だが，周知のとおり，その構想は袋小路に陥ってそれ以上に先にすすむことはなかった。それに対してハーバーマスは，その袋小路を先にすすむために，新たな構想のもとでふたたび批判理論の中心に生活世界の概念を回復しなければならなかったのである。

2．テクノクラシー論のジレンマ

『認識と関心』から『コミュニケーション的行為の理論』への「転回」については，ハーバーマス自身の回顧も含めて，すでに多くの議論が重ねられてきた。だが，よくいわれるように，「転回」の構図をたんに認識論から言語論・コミュニケーション論へ，あるいは社会理論へと整理するとすれば，そのような了解の構図そのものは依然として「伝統的理論」（ホルクハイマー）の枠内にとどまっているとはいえないだろうか。批判理論がほんらい「実践的意図のもとに構想された社会理論」であるとすれば，「転回」の原因についても，概念構成上のいくつかの理論的困難だけからではなく（もとよりそれと無関係ではないが），理論の実践的意図に即した困難からも追究されるべきであろう。ここでテーマとする「なぜ，生活世界なのか」という社会学的な問いも，おそらくその点からはじめて具体的な接近が可能になるように思われる。

すでに見たように，『認識と関心』における実証主義批判の構想は，テクノクラシーの政治支配に対するイデオロギー批判の実践的意図を，認識論的に根拠づけようとするものであった。だが，テクノクラシー・モデルの想定する社会認識を考え合わせると，そこでの認識論と政治理論（あるいは理論と実践）との媒介はそれほど容易なことではない。というのも，いかに批判的に摂取したとはいえ，ハーバーマスは，なおマルクスの社会理論に理論と実践とを媒介する弁証法の基本モデルを想定していたのであり，一方でテクノクラシー・モデルは，マルクスの理論のそうした前提がもはや現代では通用しないとするところで成立していたからである。

いうまでもなく，マルクスのイデオロギー批判のモデルであれば，批判理論の働きかけるべき意識主体は労働者階級に特定されていた。労働者階級は，イデオロギー批判を受け入れることによって，それまでブルジョア・イデオロギーのもとで隠蔽されていた資本主義の階級支配と抑圧に対して自覚的になり，実践的な政治主体として覚醒し，歴史的な解放の役割をみずからになうことになる。ところが，国家的に規制された後期資本主義の「補償計画主義」のもとでは，もはや批判理論はイデオロギー批判の働きかけるべき対象を容易に特定することはできない。国家介入によって経済の安定と成長とを維持しつつ，安定雇用と相応の福祉によって国民の一定程度の生活を保証するという，いわゆる福祉国家体制のもとでは，あからさまな階級支配は影を潜め，「階級対立は停止する」ことになる（TWI，84／81）[5]。そして，国民は大衆的に脱政治化され，もはや政治的＝イデオロギー的ではない「テクノクラシーの意識」によって，テクノクラシーの政治支配が正統化されることになる。だとすれば，いったい誰が「階級利害の背後にさかのぼり，自己構成する人類の利害を掘り起こす」というのであろうか。

ハーバーマスは論文「＜イデオロギー＞としての科学と技術」の末尾で，階級対立が潜在化した後の抗争について予測するのは難しいとしながらも，直接的には，「学生と生徒の抵抗集団」に「唯一の抵抗の潜在力」となる期待をつないでいる（TWI，100／98）。しかし，その主張は，1968年という特別な時代状況（ウォーラーステインによれば，それは「世界革命」の年であった）に

対するハーバーマスの特別な認識と共感を示すものではあっても[6]，体系的な意図をもつ彼の認識論の構想から見るならば，いかにも便宜的に過ぎるといわざるをえない。実際，急進化した学生たちに「左翼ファシズム」の批判を投げかけたエピソード（1967年のハノーヴァーの集会での発言）でも知られるように，当時のハーバーマスは，ドイツの学生たちの運動そのものに直接に「革命」や「解放的関心」を期待したわけではなかった。だが，だからといって，上のハーバーマスの共感や期待が偽りだったというわけでもないだろう。だとすれば，そこでいう学生たちの「抵抗の潜在力」とは何なのか。

今日の時点から見れば，当時のハーバーマスの議論には，あたかも後の「転回」による解決を約束するかのように，さまざまな矛盾や飛躍がちりばめられいる。そこに見られる問題の明瞭な対応関係は，それらの矛盾や飛躍が実際に批判理論の「転回」の原因になったことを示唆するものでもあろう。すでに批判理論の「転回」は理論の実践的意図に即した「展開」でもあったと述べたが，R・バーンステインも同様の点を評価して，「ハーバーマスの自己批判は，ほんものの弁証法的思想家の証明である」と述べている[7]。すなわち，『認識と関心』から『コミュニケーション的行為の理論』への転回＝展開は，当初の困難や批判を新しい枠組みのなかで克服する弁証法的過程であった，というわけである。

その困難がどのようなものであったのかを，理論の内容にもうすこし立ち入って検討してみよう。ハーバーマスは，1971年の『理論と実践』の新版に「理論と実践を媒介する試みにおける若干の難点」と題する長文の序論を付して，60年代の彼の構想そのものに対する「三つの重視すべき異論」を整理して論じている（TuP，20ff.／581以下）。それは，「転回」に着手したばかりの時点での回顧であり，ハーバーマスにとって「転回」の原初的な問題がどこにあったかを知るうえで，たいへんに興味深い。三つの異論とは，第一に「認識を主導する関心」という概念が十分に解明されていないこと，第二に，自己反省において認識と解放的認識関心がなぜ一体になるのか，そして第三に，実践の組織化の問題を欠いたまま理論と実践との関係を究明する議論には拘束力が欠けている，というものである。それに対してハーバーマスは，いかにも唐突だが，「我々は，実践的意図のもとで構想される社会理論の規範的基礎が，ある意味ではまだマルクスがそう考えていたように，弁証法的論理のなかにあるとはもはや考えていない」（TuP，23／286）と述べて，いきなり従来の批判理論の基盤を離脱するところから議論を始めている。代わりにハーバーマスがここで持ち出すのが「行為と討議」である。「というのも，行為―討議の準拠体系によれば，理論と実践との関係についての規範的問題には，思いもかけない記述的な転回が与えられるからである」（TuP，31／600）。

「行為と討議」という概念構成は，おそらく「理論と実践」という認識論的構成が「システムと生活世界」という社会理論的構成に転回する，その一歩手前の概念構成だと見ることができよう。ここでハーバーマスは，三つの異論に対して，討議（ディスコース）による妥当性の承認という基準を取り出すことによって，認識（理論）と行為（実践）とを結ぶ規範的な関係を明らかにし，

認識関心の構想の不備を新たな構想のもとで補正しようとしている。その議論はまだ十分に整理されたものとはいえないが，そこには，「理論と実践」という「孤独な主体」を想定する認識論的構成の限界を，相互主体的な討議という「社会的なもの」のなかで組み替えてゆこうとする転回の方向を，すでにはっきりと確認することができる。この討議の概念が，シュッツらの社会科学方法論を検討した当時の文献研究（1967年の「文献報告：社会科学の論理によせて」）の成果と結びついて，生活世界の社会学的概念となり，さらにルーマンとのシステム論論争を介して，「システムと生活世界」という概念構成に結実することになる。

さて，理論と実践との媒介の問題に戻ろう。三つの異論に対するハーバーマスのまとめ方からもわかるように，認識関心をめぐる概念上の問題は，最終的には，解放の理論と解放の実践ないし政治闘争との媒介の問題に集約される。そこでハーバーマスは，理論と実践を媒介する現実的な組織論を欠くという第三の異論に対して，直接に反論を向けることになる。彼は，ルカーチの「組織こそ理論と実践とを媒介する形態にほかならない」とする議論[8]を取り上げて，実践的討議を媒介しない理論と政治闘争との直接的な結合の危険性について，厳しく警告している。すなわちルカーチの議論では，理論も，理論による啓蒙も，戦略的行為の要請に従属させられることになるが，「しかしその結果，最終的に理論は，理論によって自己反省へと導かれるべき人びとの同意による確証という責任からも免除されることになる。……それどころか，従属化された大衆に向かって，理論は不可侵の客観的な法廷となるのである」（TuP，41／614）。

もとよりここでハーバーマスの念頭にあるのは，ルカーチの組織論による理論と実践との媒介に対して，その主張が後にスターリン主義的実践として現実化することになった「不幸な証明」の歴史である。だが，それはたんなる不幸な偶然であったのではなく，ルカーチの主張がヘーゲル＝マルクス主義の主体＝客体の弁証法を大前提としていたように，それは「孤独な主体」の自己反省の理論から生まれる原理的な困難と結びついており，その一つの論理的な帰結に照応するものととらえられた[9]。理論と実践との媒介は，「孤独な主体」の自己反省の理論なかで政治闘争の形態をとるならば，スターリン主義的実践と組織化の不幸な歴史のように，「詭弁的な欺瞞の可能性のリスク」を免れない。

つまり要約すれば，ハーバーマスはここで三つの異論に応答しながら，異論が交わされる問題構成の基盤そのものを抜け出してゆこうとしている。理論と実践，あるいは認識と関心，そして総体性の弁証法という構成は，もともと認識論的な構成のなかでは解決不可能な問題を認識論的に解こうとする、不適切な問題構成だったということになろうか。もはやマルクスの弁証法的論理に期待をかけないというハーバーマスの宣言は，そうした問題構成からの離脱を明快に表明したものである。当然のことながら，その離脱は『認識と関心』における認識関心の理論ばかりでなく，それと不可分なテクノクラシー論の見直しともつながってくるはずである。「抵抗の潜在力」として生活世界の問題構成が登場してくるのは，まさにその点からである。

ここではスターリン主義との関係をさきにふれたが，いうまでもなくルカーチの思想は西欧マ

ルクス主義の源流として，もともとアドルノ／ホルクハイマーらの批判理論の系譜に直接に先立つものであった。主体＝客体の弁証法は，なによりブルジョア社会における物象化批判の原則として，初期の批判理論の構想に大きな影響を与えた（TkH．I，453ff.／中，95以下）。マルクーゼの影響を受けたハーバーマスのテクノクラシー論も，もとより例外ではない。したがって，ここで見たルカーチの問題構成に対する批判は，おのずとハーバーマス自身のテクノクラシー論にもはね返ってくることになる。

すでに述べたように，ハーバーマスのテクノクラシー論は，科学と技術の政治支配というマルクーゼの主張を受けて，そこから新たなイデオロギー批判の課題を定式化しようとするものであった。もとより，それはマルクーゼの主張をただ復唱するものではなかった。『一次元的人間』の議論で知られるように，マルクーゼは実存主義的色彩のなかで，先進産業社会におけるテクノロジー支配の「全体主義化」を主張し，その絶望的な現実のかなたに非合理的な救済を求めた（「解放のカタストローフ」）[10]。それに対してハーバーマスは，労働と相互行為，あるいは技術と実践との概念的な区別を明確にすることで，テクノクラシーの＜イデオロギー＞性を明らかにし，自己反省（認識）によるイデオロギー批判（解放）の課題を論じたのである。テクノロジー支配の全体化（一次元的社会）を論じつつ，その全面的な否定と肯定との間を瞬時に揺れるかのようなマルクーゼの議論に対して，ハーバーマスのテクノクラシー論ははるかに分析的であり，マルクーゼが直観的にとらえた先進産業社会の一面を論証的にとらえているように思われる。だが，それだけに，ハーバーマスにとってテクノクラシー論のジレンマはより自覚的なものにならざるをえなかった。そこでは理論と実践との媒介の困難に重なって，科学と政治との深い裂け目が姿を現わしている。

ハーバーマスは，『公共性の構造転換』の1990年新版への序言で，この30年間に「変化した理論枠組み」について補足的な説明をしているが，そのなかで，『＜イデオロギー＞としての科学と技術』における構想のゆきづまりが生活世界とシステムの概念構成を導入するきっかけになったとして，次のように述べている。

「私は，『＜イデオロギー＞としての科学と技術』（1968）ではまだ国家と経済という行為システムを行為論的に相互に区分し，しかも一方には目的合理的ないし成果志向的な行為を，他方にはコミュニケーション的行為を区分しようとしていた。だが，行為システムと行為類型とのこうした短絡的な併置は，つじつまの合わない話になってしまった」（SdO，35／xxvi）。

当時の概念構成では，〈目的合理的行為（労働）―技術（科学）―経済システム〉という一連の概念に，それぞれ平行して，〈コミュニケーション的行為（制度的枠組み）―実践（規範）―政治システム〉という一連の概念が対応している。そしてハーバーマスは，後期資本主義の国家介入と経済発展のもとで後者が前者に一元化してゆく事態を，「テクノクラシー」として把握したわけである。そのことによってハーバーマスは，技術を実存的な「投企」ととらえて相対化しようとしたマルクーゼのあいまいな議論に対して，テクノクラシーの現実を社会理論的な分析の俎上に載せ

て,「技術と実践のちがいの消去」を生むそのイデオロギー性を明らかにすることができた。だが,制度的枠組み(「社会文化的生活世界」とも呼ばれる)の編成に関わるコミュニケーション的行為が政治システムと併置されるとすれば,政治システムと経済システムが補完し合う後期資本主義の現実において,目的合理的行為(技術)と峻別されたコミュニケーション的行為(実践)の存立はきわめて脆弱なものでしかない。

当時のハーバーマスは,制度的枠組みないし相互行為の矛盾と発展の構図をヘーゲルにならって「人倫の弁証法」と呼んだが,後期資本主義のもとでは「静止した人倫の弁証法」のゆえに「歴史以後(ポスト歴史)」の幻想が生まれ(TWI, 88/85),テクノクラシーの意識には「カテゴリーとしての<人倫>の排除」が反映しているという(TWI, 90/87)。そこではすでにテクノクラシーの支配が全体化して,もはや実践(政治)の余地は残されていないかのようである。だが,他方でハーバーマスは,「制度的枠組みの組織化は依然としてコミュニケーションと結びついた実践の問題であって,たとえどれほど科学的であろうと,たんに技術の問題ではない」(TWI, 78f./76)と述べているように,両者の区別を解消してしまうわけにはゆかない。しかし,ハーバーマスはコミュニケーション的実践を独自に論じる概念装置をまだ十分に手にしていたわけではなく,もはや政治的実践に残された余地はきわめて限定的なものにならざるをえなかった。そのことは,彼が後期資本主義の政治的実践を具体的に論じる場合の困難に,如実に見て取ることができる。

執筆時期はさかのぼるが「政治の科学化と世論」(1963)という論文で,ハーバーマスはテクノクラシー・モデルに対する別の政治モデルを検討している。そのなかでハーバーマスは「支配の合理化の第二段階」に至った今日,「政治の科学化」が進行してテクノクラシー・モデルの合理性が増大したように見えるが,なお実践的問題をすべて技術的問題に解消することはできないとして,依然としてウェーバー以来の決断主義(政治行為の最終的根拠を価値の決断だとする立場)の政治モデルが主張される余地を,まずは認めている。「<価値体系>について,すなわち社会的要求や客観的な意識様態,解放や退行の方向について,我々は,我々の技術的処理能力を拡張するような研究の枠内では,けっして決定的な発言をすることはできない」(TWI, 123/126)。それゆえに今日では,純粋な決断の範囲はせばまっているにせよ,それでも合理化できない核心的な「政治的決定の問題圏」が残る,というわけである。

もとよりハーバーマスは,テクノクラシー・モデルに対して,実践的問題を決断に解消する決断主義モデルを良しとするわけではない。だが,ここで行為論(行為する「孤独な主体」)の枠内で政治モデルを分析するハーバーマスにとって,技術的ではない実践的問題を決断にゆだねないとするならば,残るのは,技術(科学)と決断(政治)との裂け目を相互批判的に架橋するという平凡な実用主義(プラグマティズム)のモデルでしかない。しかも,「政治的実践の科学化が最高度にすすんだアメリカ合衆国」の実例が引かれるように,そこでいう「科学と政治との交流」は,要するに科学者と政治家との対話の促進にほかならない。ハーバーマスは,その交流を大規模に制度化するによって,「社会全体の発展の計画作成(プログラム化)」を課題とする論究は,

「啓蒙された意志と自己意識化した能力との弁証法」の円環をめぐることになるという（TWI, 135f.／138)。

結局ハーバーマスは，科学者（専門家）が政治家の上に君臨するテクノクラシー・モデルをしりぞけながらも，結果として，両者の対話という実用主義モデルにしたがって，「政治の科学化」を肯定的な趨勢として受容しているわけである。だが，そのような科学と政治とが相互に浸透し合う緊密な結合こそ，ハーバーマスが批判した後期資本主義のテクノクラシー・イデオロギーではなかったであろうか。実用主義モデルによるここでのテクノクラシー批判は，むしろ逆に，テクノクラシーの政治支配を社会発展の弁証法のなかで実用主義的に正統化しているようにも見える。皮肉にも，そうした逆説的な結論は，一方では，テクノロジカルな現実の完成がその現実を超越するための条件でもあるとしたマルクーゼの議論を想起させるところもあり，他方では，理論と実践とを組織的に結合するルカーチの「科学の政治化」ともいうべき主張と，そのスターリン主義的な結末を想起させるところもある[11]。いずれにしても，ハーバーマスのテクノクラシー論は，「政治の科学化」にせよ，「科学の政治化」にせよ，ここでは自己否定をまねく深刻な逆説に巻き込まれているのがわかる。当時の構想におけるイデオロギー批判（テクノクラシー批判）の糸口をそこからさらに紡ぎ出すことは，もはや困難なことのように思われる。

すでに述べたように，たしかにテクノクラシー論のこうした袋小路のなかにも，後の「転回」につながる議論が見いだせないわけではない。科学と政治との対話を媒介するという「世論 öffentliche Meinung」の概念がそうである。「実用主義のモデルによれば，技術的かつ戦略的な助言を成功裏に実践にうつすには，政治的公共性の媒介を頼りとせざるをえない。というのも，専門家と政治的決定機関との対話は……社会的利害と所与の社会的生活世界の価値志向に結びつかなければならないからである。……政治の科学化にとって，科学の世論との関係は構成的な意味をもつ」(TWI, 129／132-3)。ハーバーマスはこのように述べている。この議論から，生活世界のうちに公共的な批判の潜在力を期待し，それを世論として政治的に媒介しようとする意図を読み取るのは容易であろう。ハーバーマスが「政治の科学化」を無媒介に良しとしていないことは確かである。だが，『公共性の構造転換』以来，後期資本主義のもとでの政治的公共性の喪失，あるいは大衆の脱政治化がテクノクラシー論の前提であったことからすれば，逆にこのように理解された世論と実用主義モデルの可能性は，ハーバーマスにとって，むしろ前提用件を欠く理論的な要請ということにもなろう。ここでもまた議論は行きづまっている。

3．市民社会から生活世界へ（小括）

第一節で見た実証主義批判における生活世界概念の受容にせよ，第二節で見たコミュニケーション的行為(ないし相互行為)の概念設定，あるいは世論の公共性への期待にせよ，すでにハーバーマスの初期の構想のなかには，後の生活世界論によって分析される「抵抗の潜在力」の直感がまだ十分に理論化されないままに表明されていた。おそらくそのことは，上述のルカーチから

マルクーゼに及ぶ西欧マルクス主義の伝統の袋小路に対して，ハーバーマスが比較的早い時期から自覚的であったことを示すものといってよい。もとよりそれは理論上の問題にとどまらず，西側におけるテクノクラシーと東側における国家社会主義という，相関する現実認識に関わる問題でもあった。ハーバーマスは従来の理論と現実認識の難点を自覚しつつ，当初はフランクフルト学派の伝統にしたがって，批判理論の再構成をすすめたように思われる。そのなかで，しだいに理論と実践とを媒介する従来の認識論的な問題構成の限界が，ヘーゲル＝マルクス主義における総体性の弁証法の困難として，確認されるようになったと考えられる。彼は1985年のあるインタビューに答えて，次のように述べている。

「60年代のはじめに出版された私の本には，たしかに暗黙のうちに，私が目論んでいたことは多かれ少なかれ伝統的な理論枠組みに収められるという確信が表明されている。……しかし，分析哲学と取り組み，また実証主義論争に参加して私は，ヘーゲルに由来する全体性や真理そして理論の概念は，最終的には経験的要求を満たさなければならない社会理論にとって，あまりに重い負担を課するのではないかという疑念を深めた。……批判理論は，意識哲学の概念的抽象の隘路を抜け出し，しかも西欧マルクス主義の意図を放棄することなく，生産のパラダイムを克服するための実体的な基礎を必要とする。その成果が『コミュニケーション的行為の理論』である」(NU, 216f.／300-1)。

ハーバーマスは従来の批判理論から距離をとる一方で，言語哲学(後期ヴィトゲンシュタイン)や解釈学（ガダマー），あるいは現象学（シュッツ）などによる「社会科学における非実証主義的理論アプローチ」の成果に，「実体的基礎」の手がかりを見いだしていた。それらの成果を独自に総合しつつ，ハーバーマスはそれまで認識論的に導入されていた生活世界の概念を，日常的なコミュニケーション的行為と補完的な「社会」概念として再定義したのである。その結果，社会学的概念として再構成された生活世界には，いまや「コミュニケーション的な日常実践そのものに備わっている理性の潜在力」(SdO, 34／xxv) が「存在する理性」として承認されている。そのための理論的格闘の成果が，大著『コミュニケーション的行為の理論』にほかならない。

すでに論じてきたように，この「転回」はたんに認識論や社会科学の方法論をめぐる理論上の問題ではなく，批判理論の実践的意図に関わる問題でもあった。この「転回」によってハーバーマスは，テクノクラシー論のジレンマを抜けて，新たな構想のもとで批判理論を発展させることができたわけである。では，いまや「抵抗の潜在力」を生活世界のうちに読み込んだハーバーマスの批判理論は，「実践的意図のもとに構想された社会理論」として，「現代」という時代に対してどのような認識と思想を喚起しようとするものなのであろうか。この小括では，ひとまず問題を市民社会論との関係から概括することで，1989年以後にむしろ輝きを増すことになった，「転回」以後の生活世界の基本性格を一瞥しておきたいと思う。

ハーバーマスは『公共性の構造転換』の1990年新版の序言で，およそ30年前の自著をふり返りつつ，「『公共性の構造転換』の問題設定は，今日，＜市民社会 Zivilgesellschaft の再発見＞とい

うテーマで取り上げられている」(SdO, 45／xxxvii)と述べている。この言葉は，1961年にフランクフルトで書かれた本書の内容を多少とも知るものにとって（1990年版でも内容上の改訂はない)，いささか奇妙に聞こえるが，〈市民社会の再発見〉という主張には，ハーバーマスが生活世界概念によって喚起しようとする現代社会認識の新しい次元が集約されているように思われる。

一般的にいうならば，「市民社会 Bürgerliche Gesellschaft の一カテゴリーについての研究」という副題をもつ『公共性の構造転換』は，市民的公共性の成立と構造転換の歴史，その発生から消滅への動向を全体として論じたものであり，けっして〈市民社会の再発見〉を論じているわけではない。「社会の国家化がすすむとともに国家の社会化も貫徹し，この弁証法によってはじめて，社会と国家との分離という市民的公共性の基盤がしだいに崩壊してゆく」(SdO, 226／198)。このように述べられるように，むしろ議論の中心は，福祉国家のもとでのテクノクラシー支配と国民大衆の脱政治化の問題である。それは，すでに論じた当時のテクノクラシー論に照応するものであり，むしろ＜市民社会の喪失＞ともいうべき主張である。

〈市民社会の再発見〉というテーマに対するそうした疑念は，1989年以前の時点であれば，おそらくごく普通の反論であったと思われる。しかし今日，「市民社会」概念そのものの変容（二つの「市民社会」概念）に注意を払って読むならば，〈市民社会の再発見〉というハーバーマスの主張もけっして奇妙なものではないことがわかる。むしろそれは，批判理論の「転回」の意義を，現代の市民社会自身の変容と合わせて確認するうえで，きわめて示唆に富む発言である。以下ここでは二つの「市民社会」について，「Zivilgesellschaft」を〈市民社会〉，「Bürgerliche Gesellschaft」を〈ブルジョア社会〉とし，とくに区別を要しない場合を市民社会として，生活世界と市民社会との関係を考えてみよう。

そこでまず確認しておかなければならないのは，〈市民社会〉という用法は最近のドイツの議論で急速に通用するようになったものであり，従来はもっぱら〈ブルジョア社会〉がもちいられてきた，という事実である。もちろん，新しい用語がもちいられるのには深い理由がある。この二つの概念の区別は，きわめて重要な現代的かつ思想史的意味をもつものであり[12]，その直接のきっかけは1989年のいわゆる東欧革命の衝撃であった。すなわち，その革命が「市民革命」(「ブルジョア革命」ではなく）であり，「大規模な社会科学的実験がなされたかのように，平和的に行動する市民運動の圧力の増大によって，支配装置の革命が引き起こされた」(SdO, 47／xxxix)からである。西側資本主義社会における〈市民社会〉と〈ブルジョア社会〉との区別しにくい現実に対して，この歴史的出来事は，〈ブルジョア社会〉（東側には定義からすれば〈ブルジョア社会〉は存在しなかった）とは異なる〈市民社会〉の存在と，歴史を変革するその起爆力を，きわめて劇的なかたちで出現させたのである。

従来のマルクス主義の諸理論がこの出来事に対してほとんど説明能力をもたなかったのに対して，ハーバーマスにとってその出来事は，『コミュニケーション的行為の理論』以来の彼の批判理論の主張を立証するものとして理解された。なぜならハーバーマスは，後期資本主義の時代（東

側におけるその相関体制が国家社会主義であった）における「社会」を，システムと生活世界の二元的関係で把握し，経済と国家という二重のシステムの侵入に対する生活世界（コミュニケーション的理性）の抵抗に，時代の抗争ラインを見定めていたからである。かつて東欧諸国では，国家の諜報組織によって市民の日常的コミュニケーションは厳しく管理されていたが，それがグラスノスチ（公開性）の政策によって解放され，その潜在力を一気に爆発させ，国家と経済の旧いシステムを覆した，というわけである。したがってここでの〈市民社会〉とは，ハーバーマスにとって，従来の社会科学の言葉で表現された生活世界の内実であり，そこにおける「抵抗の潜在力」にほかならない(13)。ハーバーマスは「ブルジョア社会」との相違を，以下のように明快に説明している。

「〈市民社会〉という語の意味は，ヘーゲルとマルクス以来慣用となっている＜societas civilis＞の現代語訳である〈ブルジョア社会〉とは異なって，労働と資本と財の市場を通じて制御される経済領域をもはや含んでいない。……いずれにせよ，〈市民社会〉の制度的な核心をなすのは，自由な意志にもとづく非国家的で非経済的な結合である」（SdO，46／xxxviii）。

ここで，第二節で論じたハーバーマスのテクノクラシー論のジレンマを想起しよう。『＜イデオロギー＞としての科学と技術』における議論でハーバーマスは，行為とシステムを併置したために，経済と国家（政治）のシステムが補完し合う後期資本主義のテクノクラシーを分析する際，コミュニケーション的行為の概念にもはやその場を残すことができなかった。それに対して，上の引用からは，ハーバーマスが〈ブルジョア社会〉に還元されない，国家と経済から自立した市民の社会関係を，〈市民社会〉として特定していることがわかる。それが，今日のハーバーマスの枠組みで見るならば，後期資本主義の時代の社会システムに対して存立する生活世界のコミュニケーション的な日常実践であり，そこに担保される「抵抗の潜在力」であることは明白であろう。

ハーバーマスが『公共性の構造転換』で論じたように，かつて市民社会は国家から分離し，国家との対抗関係のなかで，市民的公共性の概念を生み出した。だが，市民の経済的自立を基礎とした市民社会は経済システムに特化した〈ブルジョア社会〉として発展し，さらに政治システムとの補完性を高めて，市民的公共性をみずから喪失していった。そこに全体化したテクノクラシーの政治支配が想定されることになったわけである。しかし，一方でその過程が〈ブルジョア社会〉ではない〈市民社会〉を分化させてゆく過程でもあったとすれば，全体化したテクノクラシーの社会認識も改められなければならない。初期の構想においてハーバーマスは，テクノクラシー論のジレンマに捕えられつつも，理論の実践的意図にしたがって批判の次元（たとえば「世論」の概念）を要請していた。かつて批判の根拠を見いだしえなかったその要請が，ここでは生活世界によって開かれる新しい〈市民社会〉の概念として，みずからの「実体的な基礎」を獲得しているのである。

こうして，かつて市民的公共性の衰退を批判的に問いかけた1961年の本書のテーマは，たしかに今日のハーバーマスにとって，「〈市民社会〉の再発見」というテーマとともに，新たな可能性

を切り開いていることがわかる。そして，そのことは，批判理論における生活世界の概念が1989年を超えて今日，いっそうのリアリティを獲得しつつあることを意味するとともに，現代社会認識として，国家社会主義の崩壊と同様に，テクノクラシー論もまたリアリティを喪失しつつあることを意味するものでもある[14]。

(注)

＊＊　ハーバーマスの著作からの引用については以下の略号にしたがって，文中に略記した。(原文／邦訳)の順で引用ページを記したが，訳文はかならずしも邦訳通りではない。

NU……　Die Neue Unübersichtlichkeit, Suhrkamp 1985
河上倫逸監訳『新たなる不透明性』松籟社，1995年

TWI……　Technik und Wissenschaft als 〉Ideologie〈, Suhrkamp 1968
長谷川宏訳『<イデオロギー>としての科学と技術』紀伊國屋書店，1970年

TuP……　Theorie und Praxis, Suhrkamp 1971
細谷貞雄訳『理論と実践』未来社，1975年

TkH, I & II…　Theorie des kommunikativen Handelns, Bd.1&2, Suhrkamp 1981
河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論』(上)(中)(下)，未来社，1985-7年

SdO……　Strukturwandel der Öffentlichkeit, Suhrkamp 1990
細谷貞夫・山田正行訳『公共性の構造転換』第2版，未来社，1994年

PS……　Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie, dtv 1969
城塚登・浜井修訳『社会科学の論理』河出書房新社，1979年

(1) J・ライクマン『ミシェル・フーコー』田村俶訳，岩波書店，1987年，149ページ以下。
フーコーと対比してハーバーマスに向けられるライクマンの批判はなかなか辛辣だが，基本的に批判が向けられている論点は「転回」前のハーバーマスの主張である点に注意したい。フーコー（権力論）とハーバーマス（批判理論）の比較は現代社会理論のもっとも魅力的かつ生産的なテーマの一つだが，ライクマンの古い対比はもはや生産的ではない。「転回」後のハーバーマスの批判の戦略は実は意外なほどフーコーに近く，両理論の現代的な対比の局面はそのうえで検討されなければならない。

(2) たとえば，今日の学校教育における深刻な「いじめ」や「自殺」の問題を考える場合にも，子どもたちの生活世界とコミュニケーション関係に対する視点をもたなければ，もはや問題状況の理解さえおぼつかないであろう。その点については，筆者も以下の論文でささやかな分析を試みたことがある。豊泉周治「競争空間のコミュニケーション――学校化社会のパラドックス――」，市川・栗原・安川編『コミュニケーションとメディアの社会心理学』新曜社，1996年（近刊予定）。

(3) この点については，豊泉周治「<遅ればせの革命>と批判理論の現在――ハーバーマスにおける1968年と1989年――」，尾関・吉田・渡辺編『ハーバーマスを読む』大月書店，1995年，を参照のこと。

(4) 現時点で見るならば「転回」の渦中にあった1971年，ハーバーマスは『理論と実践』と題された最初期の論文集（1963年）の新版を出すにあたって，「理論と実践を媒介する試みにおける若干の難点」という40ページにも及ぶ長い序論(TuP, 9ff.／563以下)を付して，その間の自身の批判理論の営みを回顧し，「その後の考察によって私がどこに導かれてきたか」を説明している。理論と実践との媒介をめぐる難点が「転回」の中心課題であったことは，この回顧からも明白である。

(5) ハーバーマスの「転回」を見るとき，「福祉国家」ないし社会民主主義についての評価もまた大きく転換していることに注意しなければならない。この時期の「補償計画主義」という評価はテクノクラシーによる政治支配の一元的表現でしかなく，それは，「民主主義的な社会的法治国家は社会主義的な民主主義へとさらに発展するというアーベントロートの構想」に，なお依拠していたという（SdO, 35／xxvi)。「転回」後の評価については別稿で論じたが，それは基本的に，福祉国家的妥協の反論の余地のない成

果を認めたうえで，「福祉国家の危機」を新保守主義との対抗関係のなかでいかにラディカル民主主義の方向で乗り越えるか，という点に，課題を集約するものである。詳しくは，豊泉周治「福祉国家の危機と批判理論のパラダイム転換」『富山大学教養部紀要・人文社会科学編』第23巻2号，25巻1号，2号，1991－1993年を参照のこと。

（6）「1968年の革命」についてのウォーラーステインの主張と意義については，拙稿「国家の政治からライフスタイルの政治へ」，後藤道夫編『日常世界を支配するもの』大月書店，1995年，また1968年の事件とハーバーマスの批判理論との関係については，拙稿「批判としての生活形式」，『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』第43巻，1994年，において，それぞれ主題的に論じた。

（7）R. Bernstein, "Introduction", R. Bernstein (ed.), *Habermas and Modernity*, Polity Press 1985, p. 15. この紹介論文でバーンスタインは，『認識と関心』から『コミュニケーション的行為の理論』に至るハーバーマスの理論的立場の変化を分析して，はじめの構想に内在する4つの欠陥が克服される経過だと論じている。なお，この論文については，後にハーバーマス自身も勝れた論文として参照を求めているほどである（NU, 217／301）。

（8）G・ルカーチ『歴史と階級意識』城塚・古田訳，白水社，1975年，479ページ以下。

（9）後の『コミュニケーション的行為の理論』におけるハーバーマスのルカーチ評価は，次のように結ばれている。「この理論は，結局，プロレタリアートの階級意識を，歴史全体の主体-客体として祭り上げることに帰着する。ルカーチは，それどころか，革命闘争の組織問題に対してかの客観主義から生じてくる，スターリン的恐怖政治において露呈した道具主義的な帰結を引き出すこともためらわない」（TkH. I，486f.／中，124）。

（10）H・マルクーゼ『一次元的人間』生松・三沢訳，河出書房新社，1980年。

（11）テクノクラシー論（テクノクラシー批判）の逆説は，おそらくウェーバー合理化論の逆説以来，現代のすぐれた多くの社会理論が解明に取り組み，またみずから巻き込まれていった問題である。その理論状況に，組織された資本主義（後期資本主義）の特有の社会構造が「歴史的位相」として反映していることは，山之内靖『現代社会の歴史的位相』（日本評論社，1982年）が，マルクス＝ウェーバー問題を背景としつつ，ルカーチ，パーソンズ，マルクーゼの理論を取り上げて，広範囲にわたって論じている。本稿でのルカーチやマルクーゼへの言及について，有益な示唆を得た。同書でのハーバーマスへの言及はすくないが，ハーバーマスはその歴史的位相を自身の理論構成に埋め込むことで，批判理論の「転回」を遂げたといえるであろう。

（12）花田達朗「公共圏と市民社会の構図」（岩波講座・社会科学の方法Ⅷ『システムと生活世界』岩波書店，1993年）を参照。本論文は，ハーバーマスとの関連を中心にして，この問題について明快な論点の整理をおこなっており，独自のハーバーマス論としても興味深い。

（13）市民社会の概念をハーバーマスの生活世界概念に依拠して再構成することの意義については，以下を参照。J.Cohen & A.Arato, "Politics and the Reconstruction of the Concept of Civil Society", A. Honneth et.al (Hrsg.), *Zwischenbetrachtungen*, Suhrkamp 1989. なお，『公共性の構造転換』は1989年になってはじめて英訳されたが（*The Structural Transformation of Public Sphere*. trans. by T. Burger, MIT Press 1989），述べたような時代状況と関連して，以来ハーバーマスの公共性論に対して，英語圏での関心が高まっている。Cf., C. Calhoun(ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press 1992.

（14）ハーバーマスも「技術と科学は，イデオロギー的プログラムとして，すでにその公共的な有効性の多くを喪失した」（NU, 248／347）として，テクノクラシー論の有効性を否定している。もとよりそれは支配のイデオロギー一般がなくなったということではなく，ハーバーマスが「転回」によって新たに向き合わなければならなかったのは，テクノクラシーに代わって，新保守主義イデオロギーであった。